佐々木則夫さん（元サッカー日本女子代表監督）

山形県尾花沢市出身。高校サッカーの名門・帝京高校の主将としてインターハイで優勝。大会後の日本高校選抜チームの主将にも指名されて海外遠征した。攻撃的ＭＦとして明大から電電関東/NTT 関東（後の大宮アルディージャ）でプレーし、86 年には同チームの日本リーグ 2 部昇格に貢献。その後、大宮アルディージャの監督などを歴任して、06 年に日本女子代表のコーチ、07 年の暮れに日本女子代表監督に就任する。北京オリンピックで４位に入ると、３年後の 2011 年にドイツで開かれたワールドカップであれよあれよと勝ち上がり、決勝では強敵の米国を倒して初優勝。〝なでしこジャパン〟を一躍、世界の頂点に押し上げた。その年にアジア初の FIFA 女子世界年間最優秀監督賞を受賞。ロンドンオリンピックでも決勝に進み、米国に敗れはしたものの日本に初の銀メダルをもたらす。女子サッカーの地位を高めた功績で、19 年６月に日本サッカー殿堂入りを果たした。

＜女性の活躍で社会の活性化を＞

サッカーの日本女子代表〝なでしこジャパン〟がワールドカップで優勝したのは 2011 年のドイツ大会でした。私がコーチから監督に就任して４年目で、次のカナダ大会でも再び決勝に勝ち進みましたが、惜しくも強豪の米国に敗れました。私は現在、古巣であるＪリーグの大宮アルディージャでトータルアドバイザーを務め、同時に女子サッカーの普及に取り組んでいます。

今年、日本サッカー協会は女子サッカーのプロ化を目指す設立準備室を立ち上げ、私が室長を仰せつかりました。「なでしこリーグ」という愛称で活動している現在の日本女子サッカーリーグは、Ｊリーグ、実業団、一般クラブ、学校などのチームで構成されており、選手の多くはアマチュアです。この女子サッカーリーグをピラミッド型のプロリーグに再構築することが、いま私たちが取り組んでいる仕事で、間もなく発表にこぎつけるところまで来ました。

プロ化というと興行面が強調されますが、普及面でも重要な機能を持つことになります。〝なでしこ〟が大活躍した当時は、国内での注目度が一気に上がり、「なでしこリーグ」が数万人の観客を集めたこともありました。ところが、ワールドカップは４年に１度の開催であり、毎回ワールドカップで優勝できるわけではありませんから、それだけで女子サッカーの人気を維持することは難しい。現在のリーグの観客は 1000 人前後にまで落ち込んでいます。あれほどの熱気を生む理解と下地はあっても、生活レベルに染み込まないとエネルギーは眠ってしまうのです。

女子サッカーをプロ化し日常化することで、様々な変化が期待できるでしょう。内閣府は男女の共同参画を呼び掛け、私もその事業に関わらせていただいていますが、官が叫んでも民が動かなければ変化はなかなか進みません。男女雇用均等法が施行されて 30 年以上が経ちますが実感として大きな実を得ていません。女性が活躍することによって、みんなの元気が湧き、社会が活性化し明るくなる……私は〝なでしこ〟の監督時代にそのことを体感しました。

世界的には、アメリカで女子のプロリーグが何度か浮き沈みし、現在はむしろヨーロッパ諸国にそうした動きが出ています。男子のサッカーと違って、日本の女子サッカーは世界のプロ化の先頭集団に加わることができるのも特色でしょう。アールビーズ社のランニングの枠を超えた Do スポーツ観に通じる企画が、いくつも生み出せると確信しています。